

# 学術情報流通における「書誌多様性」の形成に向けて

## —行動の呼びかけ—\*

### 著者

キャスリーン・シアラー, COAR (Confederation of Open Access Repositories)

レスリー・チャン, クリティカルディベロップメントセンター, トロント大学スカボロ校

イリーナ・クチマ, EIFL (Electronic Information for Libraries)

ピエール・ムニエ, EHESS/OpenEdition, OPERAS

### 査読者

ピーター・サバー, ハーバード大学図書館

ジャン・クロード・ゲドン, モントリオール大学

### 監訳者

河合将志 (KAWAI Masashi), 国立情報学研究所, オープンサイエンス基盤研究センター

### 翻訳者

南山泰之 (MINAMIYAMA Yasuyuki), 国立情報学研究所, オープンサイエンス基盤研究センター

林正治 (HAYASHI Masaharu), 国立情報学研究所, オープンサイエンス基盤研究センター

藤原一毅 (FUJIWARA Ikki), 国立情報学研究所, オープンサイエンス基盤研究センター

尾城孝一 (OJIRO Koichi), 国立情報学研究所, オープンサイエンス基盤研究センター

### 監訳者連絡先

rcos-office@nii.ac.jp



<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

この翻訳は, クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

COAR による翻訳の確認は行われていません。翻訳に疑義がある場合は原文を参照してください。

---

\* Translation of: Shearer, Kathleen, Chan, Leslie, Kuchma, Iryna, & Mounier, Pierre. (2020, April 15). Fostering Bibliodiversity in Scholarly Communications: A Call for Action. Zenodo. <http://doi.org/10.5281/zenodo.3752923>

## イントロダクション

多様性は、学術情報流通を含むあらゆるエコシステムが健全であるための重要な性質である。多様なサービス、多様なプラットフォーム、多様な資金調達方法、そして多様な評価指標が存在することで、研究コミュニティごとに異なるニーズや認識論的多元主義を支える様々なワークフロー、言語、出版物、研究トピックに対応する学術情報流通が可能となる。さらに、多様性の存在はベンダーロックイン (vendor lock-in) のリスクを軽減し、独占、寡占、価格上昇の予防につながる。

「書誌多様性 (bibliodiversity)」はここ数十年で着実に減退している<sup>1</sup>。今日の学術情報流通における支配的な「エコシステム」は、多様性を促進するどころか、Vandana Shiva (1993) のいう「精神のモノカルチャー (monocultures of the mind)」にますます類似してきている<sup>2</sup>。このエコシステムの特徴は、出版形態と販路が画一的であり、その大部分をシステムの健全性よりも利益の最大化に関心を持つ、少数の多国籍出版社が保有している点にある。私たちが直面している様々な課題に対処するためには、多様な学術情報流通が不可欠なのである。

オープンアクセスやオープンサイエンスへの移行に伴い、「ジュシュー宣言 (Jussieu Call)」において言及されている「書誌多様性」を促進する機会が生まれている<sup>3</sup>。書誌多様性の追求は、その性質上、ひとつの統一的なアプローチでは成しえない。反面、エコシステムが断片化・サイロ (Silo) 化することを避けるには、緊密な連携を必要とする。本稿は、「ジュシュー宣言」で提示された原則に基づき、学術情報流通の現状を俯瞰するとともに、より大きな書誌多様性を志向する上で、各コミュニティが個々または共同でできることを指摘し、行動を呼びかけるものである。

---

<sup>1</sup> Lipscomb, Carolyn E. *Mergers in the publishing industry*. Bulletin of the Medical Library Association. 2001 Jul; 89(3): 307-308.

<sup>2</sup> Shiva, Vandana, *Monocultures of the Mind: Perspectives on Biodiversity and Biotechnology*. Zed Books Ltd., 1993.

<sup>3</sup> Jussieu Call for Open science and bibliodiversity. (2017, October 10). <https://jussieucall.org/jussieu-call/>

## 行動の呼びかけ

私たちは、以下のような行動を通じ、書誌多様性の醸成に向け一丸となって取り組むことを提案する。

### 資金提供者・機関

- ・研究成果の評価方法の改善の必要性を謳う「研究評価に関する宣言 (Declaration on Research Assessment: DORA)」に賛同し、関連機関と協力して、研究を評価するためのより適切で公正な方法を開発し、採用する。
- ・ローカル、ナショナル、リージョナルなレベルで、オープンかつ相互運用可能な基盤とサービスを助成・支援する。

### 基盤提供者

- ・サービスにおいてコミュニティ管理モデルを採用する。
- ・オープンかつ相互運用可能な標準規格を使用する。
- ・他の組織と協力して共有型の基盤を開発する。

### 研究者

- ・オープンかつコミュニティベースな基盤を活用し、その管理に参加する。
- ・他の研究者とともにこれらの基盤を支持し、その価値を主張する。

### 図書館、コンソーシアム、図書館協会

- ・既存の投資の多様性のレベルを評価する。
- ・オープンな基盤を含む多様なコンテンツやサービスへの投資をより簡単に行えるように、「購読料モデル (pay for access)」や「出版料モデル (pay to publish)」といった取引単位での資金モデルに代わる、資金の標準モデルと基準を確立する。

### 政策立案者

- ・オープンサイエンスとオープンアクセスに関する政策の立案にあたっては、基礎となる原則として書誌多様性を含める。
- ・ローカルやナショナルレベルの研究の優先事項および価値を維持し、阻害しないような学術情報流通政策、インセンティブ、資金の枠組みを開発する。

### すべての関係者

- ・オープンサイエンスと書誌多様性のためのジュシェー宣言に賛同する<sup>4</sup>。
- ・学術情報流通の多様性を支える資金、インセンティブ、基盤がローカルレベルの政策の優先順位のなかで適切に位置づけられるような協調戦略を策定する。

---

<sup>4</sup> Jussieu Call for Open science and bibliodiversity. (2017, October 10). <https://jussieucall.org/jussieu-call/>

## 学術情報流通における多様性の必要性

書誌多様性とは、1990年代にチリの出版社のグループによって作られた造語であり、次のような概念である。「書誌多様性とは出版の世界における文化的な多様性を意味する。生物多様性 (biodiversity) に呼応して、多種多様な作品 (書籍, 脚本, 電子ブック, アプリ, 口承文学) が提供されている状態を指す。書誌多様性は、口述, 執筆, 出版などの方法で生み出された口承・文芸作品から成る、複合的で自己持続的なシステムといえる。作家や編集者は、生態系における生物に例えられる。書誌多様性は豊かな文化生活や健全なエコソーシャルシステムに貢献する<sup>5</sup>。」

この点において、システムの健全性とは、(しばしば議論の焦点になる) 単なる財政的な実現可能性のみを指すわけではなく、「多元性の維持・強化とアイデアの拡散」と<sup>6</sup>、多様な知識生産者や制度の関与を可能にすることである。私たちの共通の目標は、認識論的不公正 (知識の実践が構造化・制度化されるにあたり、特定の認識論的価値観に特権が与えられると同時に、特定の知識を持つ人や知識を得る方法が差別されたり見下されたりする場合があること) に対処しながら、思考の多様性を称揚する知識の健全な生態系を共創することである (Fricker 2007<sup>7</sup>, Santos 2014<sup>8</sup>)。書誌多様性を通じて、私たちは研究コミュニケーションを改善し、既存の偏見の是正を支援し、均質化・周縁化の問題などに取り組むことが可能になる。

私たちは、APC (論文への無料アクセスを可能にするために著者に課される出版料) モデルへの移行のような単一のアプローチに限定されないオープンアクセスモデルを構築する必要がある。単一のアプローチはイノベーションの妨げになり、書誌多様性の出現を阻止することはできないにしても、その速度を遅らせることになるだろう。ジュシュー宣言

## 書誌多様性への障壁

過去数十年の間におきた学術情報流通における多様性の低下には、相互に関連する複数の原因がある。

## 共通言語としての英語の優位性

---

<sup>5</sup> Declaration of Independent Publishers 2014: [https://www.alliance-editeurs.org/IMG/pdf/international\\_declaration\\_of\\_independent\\_publishers\\_2014-2.pdf](https://www.alliance-editeurs.org/IMG/pdf/international_declaration_of_independent_publishers_2014-2.pdf)

<sup>6</sup> 同上

<sup>7</sup> Fricker, Miranda, *Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing*, Oxford University Press, 2007.

<sup>8</sup> Santos, Boaventura de Sousa, *Epistemologies of the South: Justice against Epistemicide*. Paradigm Publishers, 2014.

現在の学術情報流通における英語の優位性が生み出した研究のグローバル化モデルは、様々な分野や研究コミュニティにおけるローカル、リージョナル、インターナショナル、さらには文化間レベルでの実践の多様性を適切に反映していない。英語以外の言語の多様性を無視することは、他の言語圏における活発な研究の実態を軽視することにつながる<sup>9</sup> <sup>10</sup>。

このような状況は、様々なレベルで研究に悪影響を及ぼしている。各国の政策立案者や評価機関は、研究者に国際誌（英語の学術雑誌など）へ投稿するよう圧力をかけたり、極端な場合には、英語で書かれたものは質が高く、そうではないものは質が低いと捉えたりしている。つまり、科学的な質とは無関係な基準により研究が評価されている可能性がある。

「学術情報流通における多言語主義に関するヘルシンキイニシアティブ (Helsinki Initiative on Multilingualism in Scholarly Communication)」に明記されているように<sup>11</sup>、学術情報流通に現地語が採用されないことは、人々が自らの住む地域で行われた研究を利活用することを妨げる最も重要な（しかし、しばしば忘れられる）要因である。現在、オープンサイエンスが学術史に刻みつつある大きな変化は、研究の社会的インパクトを高め、研究と社会を双方の利益のために再接続する必要性の増加が大前提となっている。研究成果が利用可能であるとは、インターネット上で技術的にアクセス可能である以上のことを意味する。現在、様々な国の研究者が生み出した知識の大半は、実践のためにその知識へのアクセスを必要とする人々（教師、エンジニア、医療スタッフ、農業従事者、ジャーナリスト等）が利用できない状態にある。なぜならば、国や機関の評価システムからの圧力により、現地語とは異なる言語（ほとんどは英語）で執筆・出版されているからである。

共通言語の使用はアイデアを世界的に普及させる上で有利な一方で、ローカルレベルでの研究成果の利用を妨げる可能性がある。優れたコミュニケーションシステムは、グローバルな普及とローカルな利用の双方をサポートしなければならない。学術出版における言語の多様性は、発見可能性を高める取り組み（例えば、メタデータを複数言語で記述することなど）や新世代の翻訳技術によって、研究成果へのグローバルなアクセスとともに維持される。

## 基盤とサービスの集中

---

<sup>9</sup> Packer, Abel, “Globalization and inclusiveness of scholarly communication. Scielo transition to Open Science”, Operas Conference, June 2018.

<sup>10</sup> Heilbron, Johan, Thibaud Boncourt, Rafael Schögler, Gisèle Sapiro, “European Social Sciences and Humanities (SSH) in a Global Context”, Preliminary findings from the INTERCO-SSH Project, February 2017.

<sup>11</sup> Helsinki Initiative on Multilingualism in Scholarly Communication (2019). Helsinki: Federation of Finnish Learned Societies, Committee for Public Information, Finnish Association for Scholarly Publishing, Universities Norway & European Network for Research Evaluation in the Social Sciences and the Humanities. <https://www.helsinki-initiative.org/>

学術情報流通に関わる商業出版社は、大企業の合併や買収（M&A）に加え、小規模な出版社や学術雑誌の買収を基本とするポートフォリオ構築戦略を何十年にもわたって実施してきた。その結果、数千もの学術雑誌と数十の出版物を有する少数の企業が学術情報流通を支配するに至った<sup>12</sup>。例えば、学術情報流通における支出の大半を占める学術雑誌市場では大幅な統合が進み、上位5社が市場の約50%（一部の分野では70%以上）を占めている<sup>13</sup>。最近では、いくつかの企業は多角化戦略を取り入れ、研究サイクル全体にわたるサービスへの投資を拡大している<sup>14</sup>。これらの企業は、出版社から研究基盤業者へと変貌を遂げており、データ管理から出版や研究評価まで、提供するサービスの統合化を進めている。このような状況は、研究コミュニティを商業的で専有的なサービスに閉じ込めるだけでなく、市場を蝕み、研究コミュニティが必要とする新しいサービスの開発を阻害する可能性があり、極めて危険である。基盤となるソリューションは研究コミュニティ自身が決定すべきものであり、学術コミュニティと利害が一致しない営利企業のサービスプロバイダーが押し付けるものではない。

書誌多様性は、様々なコミュニティのニーズに応えることのできる、地域に根ざしたコミュニティが主導するオープンな基盤やサービスを必要とする。また、これまでの教訓として、出版の技術的・経済的な側面だけでなく、基盤の設計と構築にかかわる社会政治的な側面にも等しく注意を払わなければならない。システムがオープンか否かだけでなく、誰が基盤やサービスを構築し、誰がアジェンダを設定するのか、誰が何のために標準規格を決定するのか、誰が基盤（および生み出された研究）を制御し、所有し、管理しているのかについても考える必要がある。学術情報流通を支える基盤は決して中立的ではないので、誰かの知識が優遇され、誰かの知識が不可視化されるという現行システムの不公平をさらに助長しかねないバイアスを認識しておく必要がある。

多様なサービスとオープンな基盤は、共通のオープンな原則に沿って、コミュニティのもとで運営されなければならないが、その必要性はまだ広く認識されていない<sup>15</sup>。cOAlition Sが「ダイヤモンドビジネスモデルを履行するための出版イニシアティブに対する支援方法を明らかにする」ための研究を助成するという最近の動向はポジティブな展開である<sup>16</sup>。しかし、これまでのオープンアクセスへの移行戦略では、小規模なサービスや、コミュニティ

---

<sup>12</sup> Larivière, Vincent., Haustein, Stefanie., Mongeon, Philippe. The Oligopoly of Academic Publishers in the Digital Era. PLoS ONE, 10(6), 2015. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0127502>

<sup>13</sup> Lariviere et.al. 2015

<sup>14</sup> Chen, George; Posada, Alejandro, and Chan, Leslie, “Vertical Integration in Academic Publishing: Implications for Knowledge Inequality” In: Connecting the Knowledge Commons — *From Projects to Sustainable Infrastructure: The 22nd International Conference on Electronic Publishing – Revised Selected Papers* [en ligne]. Marseille: OpenEdition Press, 2019. DOI: 10.4000/books.oep.9068

<sup>15</sup> Invest in Open Infrastructure statement. <https://investinopen.org/docs/statement0.2>

<sup>16</sup> Exploring collaborative non-commercial publishing models for Open Access: Apply to perform a study | Plan S. <https://www.coalition-s.org/exploring-collaborative-non-commercial-publishing-models-for-open-access/>

が運営するオープンなプラットフォームを支援するよりも、すでに確立された専有的な基盤に投資するのが主流であった<sup>17</sup>。その結果、多くのローカル、リージョナル、ナショナルレベルの基盤は、潜在的な投資家から見落とされ、運用の継続や技術革新が難しくなり、独占的な企業による買収に対して脆弱になっている。

## 限定的資金モデル

学術情報流通物の購読資金モデルは、主に第二次世界大戦後の物理的な出版物が流通していた時代に、商業出版社に牽引されるかたちで生まれた。2000年代初頭、出版物のデジタル化が進むなかで、出版社に有利な購読ベースモデルがビッグディール戦略や包括的パッケージ契約によって定着してきた。

現在、図書館（または図書館コンソーシアム）や一部の地域の政府は複数年契約でビッグディールパッケージを購入しているが、その規模やコストは交渉のたびに増加する傾向にあり、資金を他の用途からパッケージの購入に振り向けざるをえなくなっている<sup>18</sup>。図書館は出版社から少数のタイトルを購入することもできるが、その価格は多数のタイトルを含むパッケージ全体よりわずかに安いだけなので、図書館は支出を減らすことが非常に難しく、結果として出版社にロックインされた状態になっている<sup>19</sup>。このような状況下では、小規模で多様性に富んだ革新的なサービスや基盤に向けることのできる資金は限定され、学術情報流通に対する機関の現在の支出は縮小していき、小規模なサービスは極めて限られた資源をめぐって争うことになる。

多くの図書館コンソーシアムや大学は、フルオープンアクセスへの移行戦略を進めており、これには購読料の支出をオープンアクセス出版の費用に転用する、いわゆる「転換契約（transformational agreements）」についての出版社との交渉が含まれる。この戦略は、オープンアクセスコンテンツの増加につながるものとはいえ、既存の資金を同じ少数の大手出版社に対する支払いに振り替えるだけのものなので、書誌多様性を改善する可能性は低い。また、非 APC 型のオープンアクセス出版への投資の例（フランスオープンサイエンス国家基金（French National Fund for Open Science）が3つのオープン基盤へ出資するとして最近の

---

<sup>17</sup> 例えば、テイラーアンドフランシスが買収した F1000 が、欧州委員会のオープンアクセス出版プラットフォームの立ち上げと管理を受注したという最近の発表を参照されたい。

<sup>18</sup> Shearer, Kathleen, *Responding to Unsustainable Journal Costs: A CARL Brief*. Canadian Association of Research Libraries. February 15 2018 [http://www.carl-abrc.ca/wp-content/uploads/2018/02/CARL\\_Brief\\_Subscription\\_Costs\\_en.pdf](http://www.carl-abrc.ca/wp-content/uploads/2018/02/CARL_Brief_Subscription_Costs_en.pdf)

<sup>19</sup> [https://web.archive.org/web/20161225060007/http://crkn-rcdr.ca/sites/crkn/files/2016-08/5-imtg-sustainability\\_challenges\\_en\\_final.pdf](https://web.archive.org/web/20161225060007/http://crkn-rcdr.ca/sites/crkn/files/2016-08/5-imtg-sustainability_challenges_en_final.pdf)

発表など<sup>20</sup>)もあるが、学術情報流通から見た市場規模は小さい<sup>21</sup>。これは、図書館や資金提供者が、非 APC 型の学術雑誌や他のタイプのオープンサービスや基盤に資金を向けることができる、現状に代わる頑健な資金モデルを確立できていないことに一因がある。図書館や資金提供者は、資金と直接引き換えにサービスが提供されていることを容易に証明できない、取引単位ではない新しいモデル（つまり、購読料モデルや出版料モデルではないモデル）を受け入れることに消極的な傾向がある。健全な学術情報流通を保護し、育成するためには、多様なサービスを支援できるような代替的な資金スキームを広く採用する必要がある。

例えば、SCHOLCOMM メーリングリストにおける最近の議論では、小規模な出版社や非営利出版社の財政課題が取り上げられているが、この点は COVID-19 の経済的な影響によって確実に悪化するだろう。出版社の多様性を支援する呼びかけに対し、ミシガン大学出版のチャールズ・ワトキンソン局長は、「現在の危機が大学と図書館の予算に与える財政的なダメージと脆弱性を認識している」として、「図書館がボーンオープンアクセス出版社を支援する余裕があるかどうかについて、大学執行部からの質問も間違いなく出てくるだろう」と述べている<sup>22</sup>。このスレッドを立ち上げたレッドランズ大学の司書であるページ・マン氏は、「予算を反転させ、独立系出版社や学協会を優先し、残りの予算を寡占企業に振り向けるのか?」、「ダイヤモンドやプラチナオープンアクセス出版社に積極的に働きかけ、寡占出版社に身売りしないためには、図書館の支援が必要かどうか聞いてみるか?」と問うている<sup>23</sup>。書誌多様性と健全な学術情報流通のエコシステムを保護し、育成するためには、このような議論が急務となっている。

## 学術雑誌ベースの評価という偏狭な視点

研究者による論文の投稿先の決定に影響を及ぼす要因としては、大学や助成機関による研究評価の枠組みがあげられる。研究成果の評価指標としては、インパクトファクターが広く用いられている<sup>24</sup>。被引用数とインパクトファクターによって権威付けられた学術雑誌は、研究の重要性を示す指標となっており、研究者のキャリアを左右するほどの影響力を持つ

---

<sup>20</sup> French National Fund for Open Science support to three international infrastructures. March 10, 2020 <https://www.ouvri.la-science.fr/french-national-fund-for-open-science-support-to-three-international-infrastructures/>

<sup>21</sup> Union, P. O. of the E. Future of scholarly publishing and scholarly communication: Report of the Expert Group to the European Commission. January 30, 2019 <https://publications.europa.eu/en/publication-detail/-/publication/464477b3-2559-11e9-8d04-01aa75ed71a1>

<sup>22</sup> Charles Watkinson, [SCHOLCOMM] A call to support publisher diversity. March 28, 2020 <https://lists.ala.org/sympa/arc/scholcomm/2020-03/msg00140.html>

<sup>23</sup> Paige Mann, [SCHOLCOMM] A call to support publisher diversity. March 26, 2020 <https://lists.ala.org/sympa/arc/scholcomm/2020-03/msg00133.html>

<sup>24</sup> Saenen, B., Morais, R., Gaillard, V., & Borrell-Damián, L. *Research Assessment in the Transition to Open Science*, EUA Open Science and Access Survey Results. 2019 <https://eua.eu/downloads/publications/research%20assessment%20in%20the%20transition%20to%20open%20science.pdf>

ようになった。現在では学術雑誌の権威と掲載論文の質や影響力の相関関係は小さいことがわかっているにもかかわらず<sup>25</sup> <sup>26</sup>、評価指標が限られているために、多くの研究者が依然としてこの計量書誌学的な指標に基づいて投稿先を決めている<sup>27</sup>。

学術雑誌ベースの狭い評価指標に依拠することは、多くの点で書誌多様性を阻害することになる。出版社や学術雑誌は、関心の高いトピックを取り上げたり、記述言語を英語に変更したりするなど、被引用数の増加につながる編集方針を採用することで、計量書誌学的な指標の値を最大化しようとしている<sup>28</sup> <sup>29</sup>。ローカルな研究や焦点を絞った研究が、その潜在的な重要性に関わらず軽んじられる一方で、研究者や政策立案者、助成機関、研究機関なども同様に、国際誌への投稿数を最大化しようとしている。しかし当然のことながら、深遠なイノベーションがすぐさま引用につながるわけではない。また、こうしたアプローチは、研究に対する様々な貢献の価値を減少させることにもなる。例えば、データキュレーション、レビュー、ソフトウェア、モノグラフ、政策文書、カリキュラム、プロトコルなど、研究の進展に貢献し、広範な社会的影響力を持つ要素の重要性の低下をもたらす。

研究の質、独創性、革新性、影響力を真に理解するためには、被引用数等の数値的な指標を超えて、誰がどのような評価をしているのか、どのような分野で引用・再利用・閲覧されているのか、アカデミア以外でどのように応用されているのかといった質的な指標にも目を向ける必要がある。地域や分野の多様性を尊重した専門家の判断と質的な評価方法を含む様々なアプローチが求められている。幸いにも、このような認識は広く共有されつつあり、評価指標の改善に取り組むイニシアティブである DORA に賛同する助成機関や機関が増えている<sup>30</sup>。

## 結論

書誌多様性を実現しつつ、同時に世界レベルの研究を支援するようなシステムをデザインするのは容易ではない。それはすなわち、統一性と多様性、国際性と地域性のバランスをとりながら、エコシステムの分裂を回避するため、様々なコミュニティや地域のステークホルダーを調和させることを意味する。そのためには、ローカルなサービスや基盤に向けた適

---

<sup>25</sup> Lozano, G.A., Larivière, V., Gingras, Y. (2012). The weakening relationship between the Impact Factor and papers' citations in the digital age. *Journal of the American Society for Information Science and Technology*, 63(11): 2140-2145.

<sup>26</sup> Stephan, P., R. Veugelers, J. Wang. (2017) Reviewers are blinkered by bibliometrics, *Nature* April 26, 2017. <https://www.nature.com/news/reviewers-are-blinkered-by-bibliometrics-1.21877>

<sup>27</sup> Guédon, Jean-Claude. Open Access: Toward the Internet of the Mind <http://www.budapestopenaccessinitiative.org/boai15/Untitleddocument.docx>

<sup>28</sup> Bartoli, A., & Medvet, E. Citation Counts and Evaluation of Researchers in the Internet Age. 2013 <https://arxiv.org/pdf/1308.1946.pdf>

<sup>29</sup> <https://phys.org/news/2013-05-scientific-insurgents-journal-impact-factors.html>

<sup>30</sup> DORA – San Francisco Declaration on Research Assessment (DORA). (2012). <https://sfedora.org/>

切な資金と政策が必要なだけでなく、複数のツールやシステムにまたがる相互運用性を確保するための標準規格とベストプラクティスを定める国際的な取り組みも必要になる。各コミュニティは、それぞれのニーズと優先順位を慎重に検討するとともに、要件、インセンティブ、基盤、資金についての優先順位がローカルの優先順位と合致し、反対が出ることのないように、ローカルな文脈の中で他のステークホルダーと協力していく必要がある。一方、学協会、RDA、COARなどの国際的なコミュニティは、ローカル、ナショナル、リージョナルなサービス同士が連携するための標準規格とベストプラクティスを策定する場として機能することができる。また、国や地域は、既存の手段（資金の流れ、政策、インセンティブ）がどれだけ書誌多様性に貢献しているか（していないか）という観点からそれらの評価を始めるとともに、ローカルな研究を進展させる多角的なサービス、基盤、プログラムなどの保護と育成を可能にする計画の策定に着手すべきである。

## 今こそ行動を！

衰退が大きければ大きいほど、多様性を再びシステムに組み入れることは困難になる。新たな予算制約と、大規模な営利企業への資金集中が進むことで、均質化と寡占化がより深刻になりかねない。関係者はそれぞれに大切な役割を担っているものであり、私たちは、世界各国の研究者、政策立案者、資金提供者、サービス提供者、大学、図書館が協力してこの問題に取り組んでいくよう呼びかけたい。